2022年 初夏号
No.18

市美だより

鹿児島市立美術館｜KAGOSHIMA CITY MUSEUM OF ART

発行 鹿児島市立美術館
〒892-0853
鹿児島市城山町４番36号
TEL(099)224-3400

美術館ＨＰ

あなたとわくわく
マグマシティ
鹿児島市

展覧会の会期等はすべて、新型コロナウイルス感染症の地域の感染状況により変更になる場合があります。詳しくは美術館ホームページでご確認ください。

無料開放日のお知らせ

毎月第３日曜日は、小・中学生は無料開放日です。所蔵作品展 ＋ 小企画展を無料で鑑賞いただけます。
６月１９日（日）、７月１７日（日）…

フランス近代絵画

シダネルとマルタン展

光と色彩の詩情

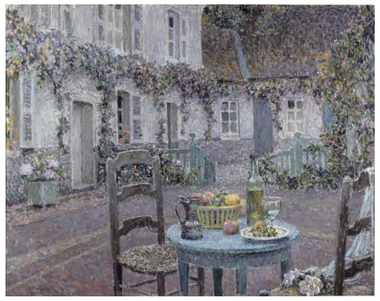
2022 7.15 FRI – 8.31 WED

今年の夏の特別企画展は現在東京のSOMPO美術館で６月２６日まで開催中の「シダネルとマルタン展」を開催します。

シダネルとマルタンは、19世紀後半から20世紀初頭にフランスを中心に人気のあった画家です。２人は当時新しい芸術運動であった豊かな色彩や点描といった印象主義や新印象主義の表現技法、人間の内面に焦点を当てた象徴主義的な主題による表現を吸収し、お互いに独自の画風を築きました。

シダネルは、黄昏時や月夜の仄かな光がゆらめく風景など、余情に満ちた光景を抑制された色調で神秘的に表現しました。一方マルタンは、明るい光に照らされた風景や人物を暗示的な表現で色鮮やかに描き、フランス国内の公共建築の壁画も数多く手がけました。

当時フランス美術界の中核を担い、同じ芸術観のもと、生涯にわたり親交を結んだ画家たちの、光と色彩が織りなす詩情豊かな作品世界をお楽しみください。



アンリ・ル・シダネル《ジェルブロワ、青い食卓》1923年

アンリ・マルタン《池》1910年以前

アンリ・マルタン《コリウール》1923年

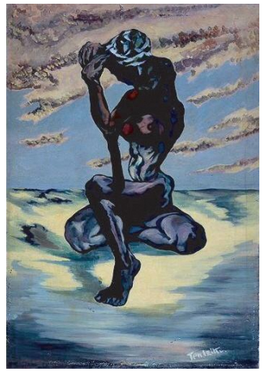
アンリ・ル・シダネル《ブリュッセル、グラン＝プラス》

初夏の所蔵品展（西洋美術＋郷土作家＋特集コーナー）

ミニ特集：シュルレアリスムと鹿児島

会期：５月３１日（火）～７月１０日（日）

シュルレアリスム（超現実主義）は、第一次世界大戦を経た1920年代のパリに生まれ、世界中に広がっていった20世紀美術の大きな潮流の一つです。この運動では、無意識の世界にどのように近づいていくかという問題に対し、湧き上がってくるイメージや連想を自由に働かせて表現する、ミロやマッソンのオートマティスム（自動記述法）の方向と、無意識の世界を写実的に描き出そうとしたダリやマグリットの魔術的リアリズムの２つの方向があります。



入来天《快楽》

日本のシュルレアリスムは、誕生の地パリ以外で最も豊かな広がりをみせたと言われています。戦前から活躍した岡本太郎などが代表作家ですが、ここ鹿児島も例外ではなく、いくつかの興味深い作品が生まれています。

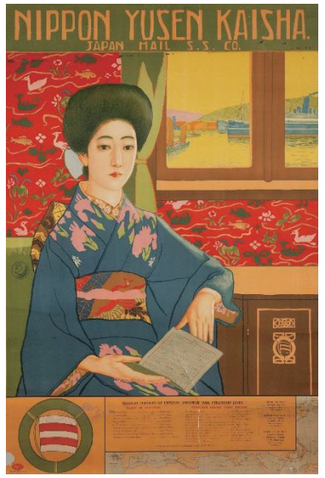
今回のミニ特集では、ヨーロッパ留学中に同時代の前衛美術の一つとしてこの運動に興味を示しつつも微妙な距離を置いた東郷青児、太平洋戦争中に疎開先の人吉でデッサンに夢中で取り組む中で、思いがけなくもオートマティスムの域に到達した海老原喜之助、さらに日本のシュルレアリスムを代表する団体・美術文化協会に参加した入来天や清野正、また国画会を舞台に独自の表現をした原田成大と和田忠志など、鹿児島出身の作家たちをご紹介します。

橋口五葉

《1914年カレンダーを手にする女（英語版）》

1913年、リトグラフ、紙　縦90.4×横60.4cm、鹿児島市立美術館蔵

2021年度に当館のコレクションに加わったばかりの橋口五葉作（1881～1921）の作品です。鹿児島市生まれの五葉は、日本画をはじめ、洋画、デザイン、版画と多彩な活躍をみせました。画像や文字を組み合わせてメッセージを伝えるグラフィックデザインの先駆者として、本の装丁やポスターなどに優れた作品を残しています。

本作は、日本郵船の海外向けのポスターで、現存するのは２点とも言われています。豪華な船内で当時流行した髪型の和装の女性がカレンダーを手にしています。船窓から見える風景には、当館が所蔵する五葉作「港」（油彩）が引用されています。

西洋的な要素を取り入れ、写実を中心としながら、線と面による図案化された表現に目を奪われます。日本女性の気品とともに、新しい時代の空気を感じさせる作品です。